

## 専門領域を持つ高専留学生に必要な語彙の実態

### —「共通語彙」と「個別語彙」の両立を目指した3年間の実践分析—

久保田 育美\*

## The Vocabulary Needs of KOSEN International Students: A Three-Year Practical Analysis Aiming to Balance “Common Vocabulary” and “Individual Vocabulary”

Ikumi KUBOTA

### ABSTRACT

This study builds on a three-year classroom practice designed for international students, aiming to balance *common vocabulary* with *individual vocabulary*. Through a vocabulary analysis of the words collected and learned by students during the practice, the study reveals the actual state of their vocabulary development. The analysis shows that approximately 50–60% of the collected words were related to their course contents, yet the overlap of words across students was low, with many consisting of highly individualized vocabulary grounded in their respective specialties and experiences. It was also found that verbs accounted for about 20% of course-related vocabulary, and that comprehension of kanji characters did not necessarily ensure understanding of the corresponding words. Furthermore, the words shared by international students with their classmates during the classroom practice were concentrated at the late-intermediate to early-advanced levels. A certain number of words overlapped with the *Japanese Academic Word List (JAWL)*, while several others were specific to their academic fields. These findings suggest that future vocabulary education for international KOSEN students should place increasing emphasis on the development of teaching materials based on accumulated vocabulary data, as well as on collaboration between Japanese language instructors and subject instructors.

**KEY WORDS:** KOSEN International students, vocabulary education, practice-based analysis, common vocabulary, individual vocabulary

## 1. 背景

### 1・1 高専における留学生受け入れ

国立高等専門学校機構（以下、高専機構）は、近年のグローバル化が進む社会のニーズを踏まえ、実践力と創造力を兼ね備えたグローバルに活躍できる技術者の

育成を目指す施策の一環として、留学生の受け入れを推進している<sup>1)</sup>。その枠組みのもとで、留学生は全国の国立高等専門学校（以下、高専）に配属され、各高専で教育を受けている。

高専における留学生受け入れの歴史は新しいものではなく、従来から国費留学生やマレーシア政府派遣留学生、モンゴル政府派遣留学生を受け入れてきた。さ

\*教養学群

らに、2018年度からはタイ政府奨学金留学生事業が開始され、日本語予備教育期間を経ずに第1学年に入学する留学生や、後期中等教育段階を終えずに第3学年に編入する留学生を受け入れるようになった。加えて、私費留学生の受け入れにも積極的に取り組んでおり、総体として高専に在籍する留学生(以下、高専留学生)の数は年々増加傾向にある。

このような多様な留学生の受け入れの拡大は、高専における国際化・多様化の進展を示すと同時に、高専留学生の日本語学習歴に大きな差異を生んでいる。とりわけ、高専編入(あるいは入学)以前にどのような日本語を学んできたかによって、編入(あるいは入学)後の学習活動の適応度合いに留学生間で顕著な違いが生じている。

### 1・2 専門日本語学習における語彙

高等教育機関に所属する留学生は、自身の専門分野を持つ。学習場面での目標言語が日本語であれば、留学生は学術的あるいは専門性の高い日本語に日々接することになる。とりわけ語彙は、特定の分野や文脈に依存して専門性を帯びることがあるため<sup>2)</sup>、一般日本語教育や日常生活で日本語に触れるのみでは習得が難しい。無論、専門性を帯びた語は日本語母語話者の学生にとっても専門学習で初めて出会う場合が多いが、日本語学習者である留学生にとってその習得負担は一層大きい。さらに、日本語においては読解力の約半分が語彙力で説明できることが指摘されており、英語など欧米言語と比較しても、日本語は読解に占める語彙力の比重が大きい<sup>3)</sup>。

ところで、英語教育においては、語彙は話者と使用目的によって English for General Purposes (EGP) の語彙と English for Specific Purposes (ESP) の語彙に大別される<sup>4)</sup>。後者の ESP では、学術英文に共通して頻出する語彙をまとめた Academic Word List (AWL) が構築されており、AWL はその語彙選定手法の手堅さも含め、現在もなお有用な学術語彙表として捉えられている<sup>4)</sup>。英語教育におけるこのような考え方を日本語教育に当てはめれば、日本語で専門分野を学ぶという共通の目的を持つ高専留学生に対して優先的に行うべき日本語教育は Japanese for Specific Purposes (JSP) が望ましいと言える。

日本語教育分野においても、学術テキストにおいて一般テキストよりも高いカバー率を示す「学術共通語彙」が松下<sup>5)</sup>によって抽出され、「日本語学術共通語彙リスト」(Japanese Academic Word List: JAWL) として提示されている。日本語学術共通語彙は、様々な学術テ

キストにおいて分野を問わずに高い使用率を示す点で専門語彙とは異なり、一般語彙と専門語彙の中間に位置する語彙として、大学留学生にとって初級の基本的語彙に次いで重要とされる。これは ESP に通じる考え方であり、特定の目的をもって日本語を学ぶ留学生の日本語教育を考える上で不可欠である。したがって、高専留学生に対する日本語教育においても JAWL の意義は大きい。実際に、JAWL やそれを基盤に開発された語彙教材<sup>6), 7)</sup>の存在は、留学生に共通して必要な語彙を平等に提供し、現に、明石高専においても留学生の語彙習得の促進に寄与している。

## 2. 問題意識と本研究の目的

高等教育機関の留学生が接する語彙の段階を、一般語彙、中間に位置する語彙(学術共通語彙)、専門語彙に大別する場合、高専留学生にとっては、学術共通語彙のような中間に位置する語彙と同等に専門語彙の理解も求められる。しかし、学術共通語彙が分野横断的に有用であるのに対し、専門語彙の内訳は分野ごとに異なる。そのため、異なる分野を専門とする高専留学生の多様なニーズに一律に対応することは極めて困難である。

ここで問い直されるのは、語彙教育では常に教師側が学習語彙を提示するべきなのかという点である。Hutchinson and Waters<sup>8)</sup>は、ESP を「特定の言語素材ではなく、言語学習の明確かつ特定の理由によって方向づけられる、言語教育の一つのアプローチ」と位置付けている(日本語訳は筆者による)。これはすなわち、学習者一人ひとりのニーズに基づいて学習方針が決定されるという考え方に即すものであると解釈できる。この視点を踏まえれば、留学生が自分に必要な語彙を個々に学んでいくことは、JSP に基づく語彙教育の一環とみなすことができる。学習効率の面では課題が残るものの、留学生一人ひとりの自律的な語彙学習の一助となるであろう。

こうした考えのもと、筆者は、留学生に共通して必要とされる語彙と個々のニーズや専門領域に応じて必要とされる語彙の双方を学習対象とする授業実践を実施している。本研究では、前者を「共通語彙」、後者を「個別語彙」と呼ぶこととし、この両者の語彙を、留学生が一堂に会す授業の場を活用して学び合う仕組みを創出してきた。実際に他の教育機関でも日本語学習者自身のニーズを重視した語彙学習の実践が行われており<sup>9), 10)</sup>、伊藤<sup>9)</sup>が示唆する自己主導型の専門語彙学習は、本研究における実践意義を支えている。一方で、留学生が授業実践を通してどのような語彙を学んだのか、

表1 各年度の授業の概要

項目	2022年度	2023年度	2024年度
科目名(実施時期)	日本語Ⅲ (2022.4~7)	日本語Ⅲ (2023.4~7)	日本語Ⅲ-2 (2024.9~2025.1)
受講留学生数	6名	6名	6名
留学生の母語	タイ語、マレーシア語、中国語 クメール語、モンゴル語	タイ語、マレーシア語、英語 クメール語、モンゴル語	タイ語、中国語 インドネシア語、ビルマ語
留学生が所属する 専門学科	機械工学科、電気情報工学科 都市システム工学科、建築学科	機械工学科、電気情報工学科 建築学科	機械工学科、電気情報工学科 建築学科

またそれは具体的にどのような特徴を有する語なのかという点については、前述した従来の実践では焦点が当てられていない。しかし、これらを明らかにすることは、高専留学生がニーズを抱く語彙の実態を把握するうえで不可欠であり、ひいては今後の高専留学生に対する語彙教育の方向性を考えるうえで重要な手掛かりにもなる。

そこで本研究では、明石高専の授業実践を事例とし、留学生が実際に収集・学習した語彙分析に焦点を当て、高専留学生が必要とする語彙の実態を明らかにすることを目的とする。3章では授業実践の概要を示し、4章で調査方法と分析結果を提示し、語彙の特徴を明らかにする。さらに5章では、高専留学生に対する語彙教育について今後の展望を述べる。

### 3. 実践の概要

#### 3.1 活動内容

2章で前述した通り、本研究で言及する授業実践では、留学生が「共通語彙」と「個別語彙」の双方を学ぶことができる活動の実現を目指している。具体的には、2022年度から2024年度の3年間にわたり、明石高専第3学年対象の日本語授業(半期)において語彙学習を促す実践を行った。表1には、各年度の受講留学生の概要を示している。

本実践は、個人活動・共同活動・振り返りから構成される(表2)。まず、宿題として個人活動1)~3)を課した。具体的には、授業内外を問わず、日常の中で遭遇した「分からない、知りたい」と思った語を一週間に10~14語収集し、語の読み、意味、例文、出現分野(場面)を語彙シートに記入することを宿題とした。そして授業中は冒頭10分程度を使い、事前に共有フォルダに格納した語彙シートを参照しながら、各自が収集した語の中から「他の留学生にも参考になる」と考える語を一語選び、クラスで共有・解説を行う共同活動4)を実施した。さらに学期終盤には、実践を通してクラスで共有された語彙をもとに練習問題を作成する共同活動5)を行い、語彙の理解・定着を図った。当活動で留学生

表2 実践の進め方

学習の進め方		
1) 日常(学習・生活場面)で遭遇した語を収集		個人活動
2) 語、読み、意味、例文、出現分野(場面)を語彙シートに記入		
3) 授業までに共有フォルダにシートを格納		
4) 一人一語ずつクラス内で共有		共同活動
5) 学期終盤に、4)で共有された語彙を中心に使い、語彙の意味や用法を問う練習問題を作成		
6) 授業最終回到授業全体の振り返りを兼ねたアンケートに回答し、自身の語彙学習について内省		振り返り

が作成した練習問題は、筆者が手直しを加えて練習問題として完成させ、学期末に留学生に配布した。なお、活動1)~3)は、2022年度に6回、2023年度・2024年度に9回実施した。活動4)は授業時間の都合により、全員が共有・解説を行う場合もあれば、一部の学生のみが担当する場合もあった。

#### 3.2 対象とする語彙

本実践で扱う「語彙」の範囲については、2022年度・2023年度と2024年度とで異なる。2022年度・2023年度は漢字で構成された語彙を対象とした。これは、受講留学生の大半が非漢字圏学習者であることから、漢字学習と共に語彙学習を進めることが効果的だと考えたためである。しかし、実践を進める中で「漢字を用いない語彙も収集したい」という意見が留学生から複数聞かれた。そこで2024年度は、漢字で構成された語彙だけでなく、平仮名やカタカナで構成された語彙も対象とすること、自分が語と認識し「分からない、知りたい」と思った語を収集対象とするよう留学生に指示を与えた。

### 4. 調査と分析

高専留学生が必要とする語彙の実態を明らかにするため、前節で紹介した実践で留学生が収集した語について、4.1節および4.2節に示す調査を行う。本章では

各調査の方法と分析結果を示す。

#### 4・1 調査①

##### 4・1・1 調査方法

留学生が収集した語（以下、収集語）のうち授業科目で遭遇した語を抽出し、(a) 留学生間での語の重複率、(b) 語の品詞の割合、(c) 一般漢字教材における掲載語との対照（2022年度・2023年度）、以上3つの調査を行う。

・調査①-(a)：まず、収集語を年度ごとにExcelにまとめ（手順A）、語彙シートに記入された「出現分野（場面）」から、授業科目で遭遇した語（以下、授業科目の語）を留学生別に抽出しExcelにリスト化する（手順B）。これをもとに留学生間の重複率を算出する。なお、授業科目の語には日本語授業で遭遇した語は含まない。これは、日本語授業で提示する語彙が、留学生の専門学習支援を意識してある程度考慮された語彙であり、留学生が他の分野（場面）で会う語彙とは状況が異なるからである。

・調査①-(b)：品詞の割合について、手順Bで抽出した授業科目の語を「名詞、動詞、形容詞、その他」に分類し、年度ごとに割合を出す。なお、本調査では留学生が語彙シートに記入した語の品詞をもとに品詞分類を行う。例えば、「混同」として収集された語は名詞に、「混同する」として収集された語は動詞に分類する。

・調査①-(c)：2022年度・2023年度は漢字で構成された語彙を対象とすることから、留学生は語を収集する過程で語を構成する漢字に着目している可能性がある。そこで、2022年度・2023年度のデータについては、授業科目の漢字と語を異なりで抽出し、漢字と語がそれぞれの程度一般漢字教材に掲載されているかを調べることにする。一般漢字教材には『留学生のための漢字の教科書 中級700(改訂版)』（国書刊行会）および『留学生のための漢字の教科書 上級1000(改訂版)』（国書刊行会）を使用する。当該教材を扱うのは、特定の目的や場面を意識した教材ではないこと、中級～上級レベルとしたのは、調査対象とする2年度分の漢字の旧日本語能力試験（以下、旧JLPT）の級を調べたところ、旧JLPT1～2級相当の漢字が合計97.17%に達したことが理由である。なお、旧JLPTの級を調べる際は、『日本語能力試験漢字ハンドブック』（アルク）を使用する。

##### 4・1・2 分析結果

収集語の語数は、2022年度：357語、2023年度：615語、2024年度：618語であった。このうち、授業科目

の語はそれぞれ174語（49%）、380語（62%）、373語（60%）であった。各年度において、収集語の約5～6割が授業科目の語であり、それ以外が日本語科目の語や日常生活で見聞きする語（以下、生活語）であることが分かる（図1）。また表3には、参考までに授業科目の語の内訳を年度ごとに示す。科目の分類方法には検討の余地があると思われるが、本稿では科目別の特徴の分析は行わないため科目の分類は便宜上行う。具体的には、全学科共通の理数系科目（化学・物理／基礎力学・数学）は個別の項目に、各学科の専門科目は全て「専門科目」に、化学・物理／基礎力学・数学および専門科目以外の授業の語は「教養科目」に分類している。

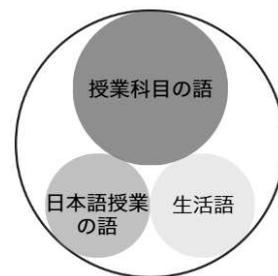
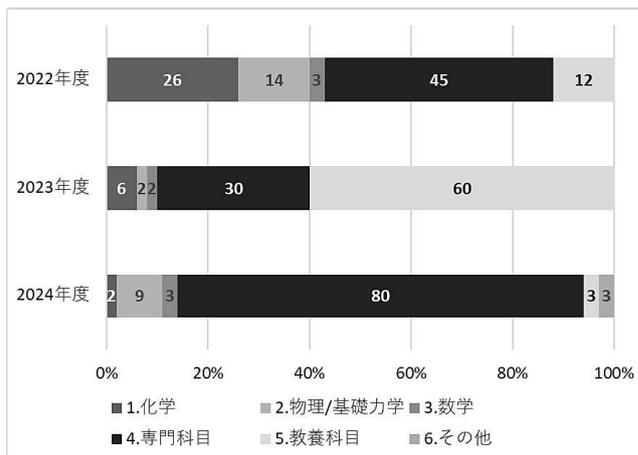


図1 収集語の内訳

表3 授業科目の語の内訳



この結果を踏まえ、まず調査①-(a)を見ていく。留学生間の語の重複率は、2022年度：14.9%（延べ26語）、2023年度：25.0%（延べ95語）、2024年度：10.6%（延べ39語）であった。重複率が高くないことは、留学生の専門分野の違いや接する語彙量の大きさを考えれば当然の結果とも言えるが、それでも重複しない語の多さは収集語における個別性の高さを示しており、語彙学習における個々対応の必要性を裏付けている。

続いて調査①-(b)で品詞比率を年度別で見たところ、表4の通りとなった。3年間の平均は名詞：70.0%、動詞：23.0%、形容詞：5.1%、その他：1.9%であった。ここで特筆したい点は、いずれの年度も動詞比率が20%を超えているということである。一般的に、語彙リストや教科書の索引に掲載される語はその多くが名詞で

表4 収集語の品詞比率

年度	全語数	名詞	動詞	形容詞	その他
2022	174	120	42	10	3
	品詞比率 (%)	69.0	24.1	5.7	1.7
2023	380	282	77	19	2
	品詞比率 (%)	74.2	20.3	5.0	0.5
2024	367	247	90	17	13
	品詞比率 (%)	67.3	24.5	4.6	3.5
品詞比率 (%) 3年間の平均		70.0	23.0	5.1	1.9

ある。例えば、明石高専第3学年の授業で使用されている『新編化学』(東京書籍)および『基礎力学』(裳華房)の索引を見ると、動詞の語はどちらの教科書にも掲載がない(ただし、「拡散、浸透、分裂」のようにサ変動詞の語幹となる語は『化学』に8語、『基礎力学』に3語含まれる)。動詞の語は名詞の語に比べ、教科書の重要語や専門語としては扱われにくいということである。しかし実態として、動詞の語は収集語の2割に上る。収集語の授業科目の語のうち、「無視する」(物理、化学)、「奪う」(環境生態学)を例にとる。これらの語は、日常的には「人を無視する」「相手の所持物を奪う」といった意味・用法を持つが、収集語では「分子間にはたらく力が無視できる」「動物の生息場所を奪う」のように、それぞれ「～を気にしなくてよい」「機会を取り去る」のように用いられている。これらは、一般日本語教育ではあまり扱われることのない意味・用法である。また、「つんのめる」(基礎力学)、「つかさどる」(情報)という語の場合は、平仮名であるゆえに意味の推測が難しく、且つ日常的にも低頻度で出現する。そのため、これらの語が既知語でない限りは、テキストに出現した際のテキスト全体の意味理解が困難となる。

最後に調査①(c)の結果を見ていく。授業科目の語の漢字と語の異なり数を算出したところ、漢字は2022年度:161字、2023年度:299字、語彙は2022年度:174語、2023年度:327語であった。そしてこれらの漢字と語を一般漢字教材と対照した結果、掲載があった漢字は2022年度:91.3%(147字)、2023年度:93.0%(278字)、掲載があった語は2022年度:27.6%(48語)、2023年度:39.4%(129語)であった。学生が収集した語を構成する漢字は、その9割以上が一般漢字教材に掲載されているが、その一方で、それらの漢字で構成される語は必ずしも一般漢字教材に掲載されるわけではなく、むしろ掲載されている割合が漢字に比べて極めて低いということが分かる。このことから、漢字単体の理解と語の理解が連動するとは限らないと考えられる。

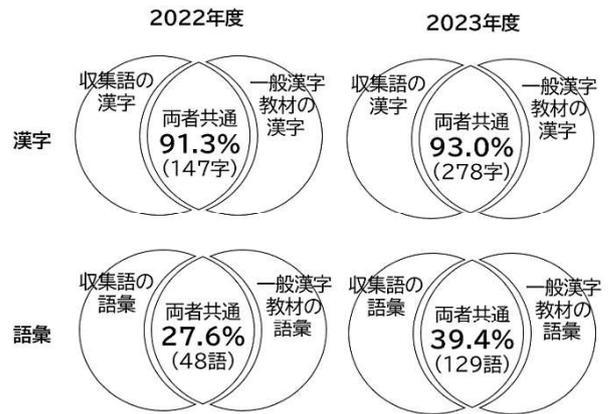


図2 収集語と一般漢字教材における漢字と語彙の比較

さらに、留学生が「分からない、知りたい」と感じる理由は、それが未習漢字だからではなく、漢字が持つ特有の読みや、漢字が構成要素となって語になったときの意味が理解できないことに起因する場合があると推察される。例えば、「荷重」(物理)、「近似する」(実験)の「荷」「似」は日本語学習者が難しい印象を持つ漢字でない。しかし、これらの語では、「カ」「ジ」のように、一般日本語教育で主に扱われる読み(「荷物」の「ニ」、「似ている」の「に(ている)')とは異なる読みが用いられている。また、「荷重」の「荷」は「荷物」の意味ではなく、物理学における「charge」の意味を持つ。

## 4・2 調査②

### 4・2・1 調査方法

3章で前述した通り、表2の共同活動4)では、留学生が収集語の中から「他の留学生にも参考になる」と考える語を一語選び、それを授業内で共有・解説した(以下、本活動で共有された語を「共有語」とする)。当活動は、学習場面と生活場面の双方を含む高専生活で必要性が高い語、すなわち「共通語彙」を学び合う場の創出を目的としている。つまり、留学生が「仲間と共有する価値がある、仲間の役にも立つ」と考えた語が本節の調査対象となる。

そこで調査②では、共有語の実態を見るために、共有語の難易度レベル(初級前半から上級後半までの6段階)の平均、ならびに「日本語学術共通語彙リスト(JAWL)」に掲載されている語のカバー率を調査する。調査にはそれぞれ、日本語教育で重要な17,908語を収録する『日本語教育語彙表 Ver.1.1』<sup>11)</sup>および『日本語学術共通語彙リスト Ver.1.01』<sup>12)</sup>を用いる。

#### 4・2・2 分析結果

共有語の語数は、2022 年度：52 語、2023 年度：39 語、2024 年度：39 語であった。

まず、各年度の共有語における難易度レベルを見ていく。ここでは、初級前半を「1」、初級後半を「2」、上級後半を「6」のようにして難易度レベルをコードで示す。また、検索しても該当語が存在しなかった場合は、『日本語教育語彙表』の収録外の語として「7」を付すこととする。調査の結果、共有語の難易度の平均は、2022 年度：4.2、2023 年度：4.7、2024 年度：5.6 となった。各年度の難易度の内訳は表 5 の通りである。

表 5 共有語の難易度レベル

難易度	初前	初後	中前	中後	上前	上後	該当無
コード	1	2	3	4	5	6	7
2022 年度	1	1	11	25	7	1	6
	1.9	1.9	21.2	48.1	13.5	1.9	11.5
2023 年度	0	0	6	17	7	1	8
	0	0	15.4	43.6	17.9	2.6	20.5
2024 年度	0	0	1	8	13	1	16
	0	0	2.6	20.5	33.3	2.9	41.0

※各年度の上段は語数、下段は割合 (%) を示す

この結果から、共有語の難易度レベルの平均が中級後半であること、年度によって多少の差はあるが、中級前半から上級前半に語のレベルが集中し、共有語全体の 5.5～8 割ほどを占めていることが分かる。4.1 節の調査①(c)では、授業科目の語と一般漢字教材（中級および上級）に掲載されている語との対照を行い、授業科目の語が一般漢字教材の語をカバーする割合が 2022 年度：27.6%、2023 年度：39.4%にとどまることを見た。比較対照とする素材が同一ではないため明言はできないものの、この結果と単純比較した場合、共有語の難易度レベルは授業科目の語の難易度レベルに比べて低く、一般的な場面で身近に使う語が相対的に多く含まれる傾向にあるということが分かる。

続いて、JAWL との対照結果を表 6 に示す。また表 7 では、3 年度分の共有語を難易度別に分類して示す。JAWL に掲載されている語には下線を引いている。

まず、共有語における JAWL カバー率は、年度によって大きく異なっており、2022 年度が 32.7%と最も高いことが分かる。これは、2022 年度の留学生在が授業で共有した語の中に学術場面で用いられる語が多く含まれていたこと、他方、2023 年度・2024 年度の留學生の間では個別性の高い語や生活語が多く共有される傾向にあったことを示している。

さらに、表 7 で共有語の具体例を難易度別に概観す

表 6 共有語における JAWL カバー率

年度	共有語	
	全語数	JAWL 掲載語
2022	52	17
	JAWL カバー率 (%)	32.7
2023	39	6
	JAWL カバー率 (%)	15.4
2024	39	8
	JAWL カバー率 (%)	20.5

表 7 難易度別の共有語、JAWL 掲載語

難易度	共有語
初級前半	軽い
初級後半	易しい
中級前半	規則、競争、ほとんど、録画、正解、合格、枕、残業、お小遣い、感謝する、修理する、違反する、渡す、嘔吐、いらいら、激しい、酷い、大部分、
中級後半	挿入、 <u>仮定</u> 、 <u>特徴</u> 、 <u>解決</u> 、 <u>展開</u> 、 <u>障害</u> 、 <u>間隔</u> 、 <u>改善</u> 、 <u>障害</u> 、 <u>指示する</u> 、 <u>採用する</u> 、 <u>混乱する</u> 、 <u>努める</u> 、 <u>我慢</u> 、 <u>嵐</u> 、 <u>双子</u> 、 <u>広告</u> 、 <u>魅力</u> 、 <u>面倒</u> 、 <u>解雇</u> 、 <u>送信</u> 、 <u>成績</u> 、 <u>禁煙</u> 、 <u>犠牲</u> 、 <u>推理</u> 、 <u>総額</u> 、 <u>負担</u> 、 <u>栄養</u> 、 <u>推理</u> 、 <u>罰金</u> 、 <u>震え</u> 、 <u>穏やかな</u> 、 <u>明け方</u> 、 <u>風通し</u> 、 <u>大胆な</u> 、 <u>愉快な</u> 、 <u>平らな</u> 、 <u>精神的</u> 、 <u>典型的</u> 、 <u>根本的</u> 、 <u>貯める</u> 、 <u>抱える</u> 、 <u>輝く</u> 、 <u>許す</u> 、 <u>勧める</u> 、 <u>訪問する</u> 、 <u>継続は力なり</u> 、 <u>手を貸す</u> 、 <u>～とたん</u> 、 <u>～の反面</u> 、
上級前半	<u>顕著</u> 、 <u>希薄</u> 、 <u>概念</u> 、 <u>各々</u> 、 <u>欠陥</u> 、 <u>兆候</u> 、 <u>由来</u> 、 <u>損なう</u> 、 <u>施す</u> 、 <u>矛盾する</u> 、 <u>～を踏まえて</u> 、 <u>執筆</u> 、 <u>筆</u> 、 <u>細胞</u> 、 <u>蒸発</u> 、 <u>紙幣</u> 、 <u>寸法</u> 、 <u>批判</u> 、 <u>静寂</u> 、 <u>衰え</u> 、 <u>あやふや</u> 、 <u>囁く</u> 、 <u>雄大な</u> 、 <u>頻繁に</u> 、 <u>栽培する</u> 、 <u>詰めが甘い</u> 、 <u>ひらめく</u>
上級後半	断面、翼、しっくり
該当無	<u>凝固</u> 、 <u>付着</u> 、 <u>抜本的</u> 、 <u>ひいては</u> 、 <u>隙間</u> 、 <u>融解</u> 、 <u>沸点</u> 、 <u>昇華</u> 、 <u>融解</u> 、 <u>心底</u> 、 <u>神祠</u> 、 <u>修練</u> 、 <u>坪庭</u> 、 <u>賞賛</u> 、 <u>後押し</u> 、 <u>恒久</u> 、 <u>くま(隈)</u> 、 <u>如く</u> 、 <u>汎用性</u> 、 <u>風解性</u> 、 <u>潮解性</u> 、 <u>脚光を浴びる</u> 、 <u>たむろする</u> 、 <u>湾曲する</u> 、 <u>劣化する</u> 、 <u>二世帯住宅</u> 、 <u>可逆反応</u> 、 <u>誹謗中傷</u> 、 <u>本末転倒</u> 、 <u>余儀なくされる</u>

※下線は JAWL に掲載されている語を示す

ると、共有語が最も多い「中級後半」の語には、JAWL 掲載語が 13 語と多く含まれていることが分かる。JAWL 掲載語以外の語であっても、「典型的、根本的、～の反面」といったような、生活場面よりも学術場面で多く用いられる語が複数見られることが「中級後半」に属する語の特徴と言える。次いで語数が多い「上級前半」にも、JAWL 掲載語が 11 語含まれる。ここでは、より抽象的な意味を表す語や、「顕著、～を踏まえて、執筆」などの文章表現の指導においてよく導入される

語が目立つ。これは、留学生が専門科目の読解やレポート作成で直面する語彙が共有活動に反映されていることを示していると考えられる。一方で、「上級後半」や「該当無」には、「断面、凝固、融解、坪庭、可逆反応」といった理工系分野の中でも特定の分野に特化した専門語が多く含まれる。こうした語が『日本語教育語彙表』や JAWL に掲載されていないことは不思議なことではないのだが、表 7 で示された結果を見ることで、専門語彙が『日本語教育語彙表』や JAWL ではカバーしきれていないことを改めて確認することができる。なお、「初級前半」、「初級後半」に属する語も少数ながら共有されており、「軽い、易しい」が含まれている。ただし、これは必ずしも学習難易度を反映するものではなく、一留学生が「自分にとって必要」と判断した語が共有された結果と言つてよいであろう。

#### 4・3 まとめ

高専留学生が必要とする語彙の実態について、本調査で明らかになった点は以下の4点である。

- ・収集語の 5-6 割は授業科目の語であるが、学生間での語の重複率は低く、それぞれの専門分野や経験、関心に基づく語彙が多い。したがって、授業科目の語は個別性が高く、「個別語彙」を多く含んでいると考えられる。
- ・動詞の語は、教科書の索引にほとんど現れないにもかかわらず、授業科目の語の約 2 割を占めている。これは、動詞が留学生の学習活動において文脈理解を左右する重要な役割を果たしている可能性を示す。いわゆる専門用語として挙がりやすい名詞の語のみならず、分野特有の意味・用法を持つ動詞の語の指導も重要である。
- ・漢字自体の理解と語の理解が連動するとは限らない。漢字が持つ特有の読みや、漢字が構成要素となって語になったときに専門性の高い意味が生じる場合がある。
- ・共有語が最も多く含まれる「中級後半」、「上級前半」の語には学術場面で用いられる語が相対的に多く見られることから、「共通語彙」の実態は学術共通語彙に通ずるところがあると考えられる。しかし、共有語の中に専門語彙も複数含まれていることから、依然として専門領域に応じたニーズが読み取れる。

#### 5. おわりに

本研究では、留学生に共通して必要とされる「個別語彙」と個々のニーズや専門領域に応じて必要とされる「共通語彙」の双方を学ぶという明石高専の授業実

践を事例に、留学生が収集・学習した語彙を分析することで、高専留学生が必要とする語彙の実態を明らかにした。

本研究を通して、高専留学生が各自の専門領域に応じた語彙へのニーズを抱えていること、教科書の索引に出現しないような語であっても、分野特有の意味・用法を有する語については積極的に指導を行うことが効果的且つ重要であることが分かった。今後の語彙教育の方向性としては、本研究で得られた3年度分の語彙データを整理し、分析結果を踏まえて高専留学生に必要な語彙の知見を蓄積すること、留学生が学科を問わず履修する専門基礎科目にまずは焦点を当て、その語彙の理解と定着を促す教材作成を行うことが考えられる。そのためには、日本語教育担当者と専門科目・専門基礎科目担当者の連携が欠かせない。多様な日本語学習歴を持つ留学生の増加を背景に、専門学習に円滑に適応できる高専留学生の育成を考えるならば、日本語教育分野と専門科目・専門基礎科目分野の協働という視点は、今後ますますその重要性を増していくと考えられる。そしてそれにより、高専留学生の専門日本語学習支援も一層充実していくのではないだろうか。

#### 参考文献

- 1) 外国人留学生向け入学案内(国立高等専門学校機構本部事務局国際企画課) : <https://www.kosenk.go.jp/wp/wp-content/uploads/2023/12/nyugakuannai2024.pdf> (2025.9.22)
- 2) 杉山暦、久保田育美：化学分野を専門とする留学生に必要な漢字・語彙—化学教科書と既存教材との比較対照を通して—、日本語教育、186号、pp.16-31 (2023)
- 3) 松下達彦：コーパス出現頻度から見た語彙シラバス、森篤嗣編、ニーズを踏まえた語彙シラバス、くろしお出版、pp.53-77 (2016)
- 4) 石川慎一郎：上級英語学術語彙表“BABILON2000”の開発—6つの理念に基づく新しいEGAP語彙選定の試み—、石川有香編、ESP語彙研究の地平、金星堂、pp.2-20 (2018)
- 5) 松下達彦：日本語の学術共通語彙(アカデミック・ワード)の抽出と妥当性の検証、2011年度日本語教育学会春季大会予稿集、pp.244-249 (2011)
- 6) 石澤徹、岩下真澄、伊志嶺安博、桜木ともみ、松下達彦：語彙ドン！[Vol.1]—大学で学ぶためのことば—、くろしお出版 (2018)
- 7) 石澤徹、岩下真澄、桜木ともみ、松下達彦：語彙ドン！[Vol.2]—大学で学ぶためのことば—、くろし

お出版 (2021)

- 8) Tom Hutchinson and Alan Waters: English for Specific Purposes: A learning-centered approach, Cambridge University Press (1987)
- 9) 伊藤秀明: 専門日本語教育における自己主導型学習の可能性—学習者による‘私の’ 専門語彙の抽出とリスト化—, 専門日本語教育研究、第 16 号、pp.23-28 (2014)
- 10) 鈴木綾乃、松島調: 私にとって/みんなにとって重要な言葉を学ぶ—「MY ことば活動」の実践と課題—, 日本語教育方法研究会誌、Vol.31、No.2、pp.106-107 (2025)
- 11) 日本語学習辞書支援グループ: 日本語教育語彙表 Ver1.1、<http://jhlee.sakura.ne.jp/JEV/> (2025.9.22)

- 12) 松下達彦: 日本語学術共通語彙リスト Ver.1.01、<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/list.html#jcaw> (2025.9.22)

#### 資料 (本文登場順)

- 1) 佐藤尚子、佐々木仁子: 留学生のための漢字の教科書 中級 700 (改訂版)、国書刊行会 (2017)
- 2) 佐藤尚子、佐々木仁子: 留学生のための漢字の教科書 上級 1000 (改訂版)、国書刊行会 (2018)
- 3) アルク日本語出版編集部: 日本語能力試験漢字ハンドブック、アルク (1994)
- 4) 竹内敬人ほか: 改訂新編化学 (平成 29 年度検定済教科書高等学校理科用)、東京書籍 (2017)
- 5) 中山正敏: 基礎力学、裳華房 (2004)